

# アシスト

市川市サッカー協会第4種委員会 委員長 石原孝幸

## — 理想のチームづくり③ —

4年に一度の夢のような日々が続いております。毎日、国 vs 国のゲームが見られ、ニュースもサッカー関係ばかり、私はLIVEがいいので、どうしても寝不足みですが、みなさんはいかがでしょう。我が全日本は、期待空しく、残念ながらGLで敗退してしまいました。期待の大きさと現実との落差に失望感でいっぱいだった方も、決勝トーナメントが始まり、一発勝負の研ぎ澄ました試合が続き、気持ちを切り替えて、サッカーの醍醐味を満喫されていることと思います。4年に一度の夢のような日々。さらに楽しみましょう。という訳で、6月はとても委員長通信の出せる状況ではありませんでした。

さて、7月1日に次のようなニュースが流れました。ご記憶の方もおいでのことと思います。

今年5月の全日本少年サッカー大会富山県大会で、男性監督が選手に暴行していたことが分かり、大会を主管する富山サッカー友の会は先月30日、監督を16年3月まで指導禁止の処分にした。暴行は、動画サイトのユーチューブに投稿された映像がきっかけで発覚した。5月18日に富山市殿様林緑地グラウンドで開かれた全日本少年サッカー大会富山県大会の予選で、「UOZU FOOTBALL CLUB・スペランザ」の37歳の監督が、小学6年の選手の腹を蹴り、その後、ボールを投げ付ける様子が映し出されている。選手にケガはなかったという。暴行を加えた監督「大事な試合の前で、その選手だけが悪ふざけをしていたので、注意したが収まらなかったので（暴行を加えた）」この男性は10年以上前に監督になって以来、たびたび暴力を振るってきたという。これを受けて、富山サッカー友の会は先月30日、緊急の規律委員会を開き、この監督に対し、16年3月までの指導禁止の処分を決めた。

まだこのような指導者が、日本には多いのかと情けなくなったのは私だけではないと思います。暴行により、指導者の思い通りの結果となったとしても、選手の心からの意欲や自主性、考える力を育てることはできません。暴行を受けた選手は服従することを学習し、指導者の目を気にしてサッカーをするようになります。

この監督やチームのことを想像してみました。たぶん、この監督はサッカー経験者でしょう。プレーヤーとしてもそこそこ自信があり、もしかしたら現在も社会人としてサッカーを楽しんでいる方もかもしれません。実は、こういう人が小学校年代の指導者として一番危いのです。

なぜかという、人は教える時、自分の受けた指導をそのまま適用してしまいがちだからです。服従による指導を受けた人は、自分も服従による指導をしようとします。もちろん言葉による服従も含まれます。そして、自分はサッカーを知っているという自負から、知っていることを与え続けようとしてしまいます。最初から、指導者の考える正解を与え、その通りにさせることに腐心し、子どもが考え判断し、成功したり失敗したりしながら問題解決する力を蓄積していく機会を

奪ってしまいます。富山の事件は大事な試合前ということでしたが、日々の指導、試合中の指示等も同じようなものでしょう。さらに、小学校年代の選手は従順ですから、選手からの反発はまずありえません。このような指導者のチームが、間違っただけで大会等で良い結果を残そうものなら揺るぎない自信となり、その指導はさらにエスカレートしてしまいます。

このような、指導の結果、どのような選手が育つのでしょうか？ ある程度は強くなるでしょうが、その指導者を超える選手は、まず育ちません。サッカー経験者が小学校年代の指導者として陥りやすい危うさを少しお分かりいただけたでしょうか。

また、チームとしては、この監督に任せきりで、周りの指導者は口出しは出来ず、たしなめる人もいなかったと思われます。10年以上たたびたび暴力を振るってきたということですから「ボランティアのチームなんだから、指導方針がいやならやめてくれ。」というスタンスだったかもしれません。

話は変わりますが、残念なことに市川市においても、本年度のある大会で、試合中のベンチの面前で、コーチが選手を平手打ちにするという事件がありました。会場責任者からの報告により、選手はこのコーチの子どもで、ついカットなって手が出てしまったとのことでした。

この事件は、第4種委員会役員会でも取り上げられ、協議の結果、委員長が事実確認をし、場合によっては、厳重注意、助言・指導等を行うことになりました。

早速該当チームの代表者に確認したところ、事件は事実であること、当事者は反省していることが分かりました。また、事件を受けてチームの指導者を集め、二度とこのような行き過ぎた指導がないように共通確認したことも分かりました。

今回お話したことは、どのチームでも起こりうることとして、今一度自チームに置き換えて、深く考えていただきたいと思います。そして、もし、問題と思われることがあったら、市川の該当チームのように、勇気を持って正しい方向で共通理解を図って欲しいと思います。自浄作用の無くなったチームは、いずれ必ず滅びます。

前回の委員長通信で『「子どもを中心に考える」指導が「わかる」から「できる」に、どんどん広がってくれている』と書きました。疑問に思われる方もいるかもしれませんが、だからこそ、市川の該当チームのように、他から指導される前に、間違っただけで指導を正すべく、チームとして自省の場を持たせたのだと思います。

服従による指導は、陶酔してしまう心地良さがあります。だれもが陥りやすい危うさをもっています。サッカー経験者は特に危ない。このことを自覚し日々の指導にあたっていたいただければと思います。

「委員長通信」へのご意見ご質問は、FAXにて、四種委員会事務所までお願いいたします。 FAX 047-324-3207